

氏名 (生年月日)	竹中真也 (1978年3月19日)
学位の種類	博士 (哲学)
学位記番号	文博甲第90号
学位授与の日付	2014年3月20日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	パークリの「記号理論」 — 「精神の形而上学」に寄せて —
論文審査委員	主査 宮武 昭 副査 須田 朗 一ノ瀬 正樹 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 論文の目的

竹中氏は学部卒業論文から直近の論考に至るまでパークリ哲学の研究に専念し、博士後期課程進学後はほぼ毎年精力的に論文を執筆してきた。これらの論考に一貫して見られるのは、パークリ哲学の最初期から最後期までを「精神の形而上学」として読み解こうとする野心的な試みである。そもそも氏がその修士論文において詳細に検討・批判したのも、『認識問題』におけるカッシーラーのパークリ解釈であった。その解釈によれば、パークリの前期と後期には断絶があり、彼は前期の「感覚主義」あるいは「現象主義」から後期の「神学的形而上学」に転向した。そして、この『認識問題』で近代自然科学の成立を跡づけたカッシーラーはむしろ前期のみを高く評価し、この評価は我が国においてもほぼ踏襲されてきたと言ってよい。こうした状況にあって、氏のパークリ研究は大きな意義をもっていると思われる。すなわち、後期の著作をも視野におさめて考察しようとする氏の果敢な姿勢は、パークリ哲学をロックとヒュームにはさまれた近代イギリス経験主義のなかのひとつのエピソードとしてではなく、新プラトン主義にすら遡源するもっと大きな神秘的あるいは神学的形而上学の思潮のなかで見ることすら可能にするかもしれない。この着想はけっして奇をてらったものではない。主著と目されている『人知原理論』（1710年）のうちで、現在「本論」とみなされている部分はそれこそ「現象主義」を標榜する論調が目立つものの、しかしながら、その初版ではこの「本論」には「第一部」という表題が付されていて、これがもっと大きな体系の一部でしかなかったことを推測させるし、若いころの手稿『哲学評注』や『ハイラスとフィロナスの三つの対話』（1713年）の「序文」からも、形而上学を論じるはずの第二部が構想されていた（そして、じっさいに執筆されていたかもしれない）ことがうかがわれるからである。

本論文はこうした壮大な研究計画の端緒である（本論文副題の「精神の形而上学」に寄せて）は、この研究構想の出発点であることを示唆している。氏によれば、「精神の形而上学」構築の理論的

基盤となる非物質論 (immaterialism) の中核には、もっとも抽象的な観念としての「物質 (matter)」を否定する「記号理論」が位置している。そして、この「記号理論」を提示しているのが主著『人知原理論』の「序論 (Introduction)」(以下「序論」は『人知原理論』のそれを指す)である。したがって、この「序論」は『人知原理論』という一著作の「序論」であるにとどまらず、バークリ哲学全体にとっての「序論」ともなるわけである。しかしながら、この「序論」の読解は容易ではない。たとえば、節と節とのあいだの繋がりや切れ目の関係が判別しにくいという基本的な問題がある。バークリ研究者たちもこの問題にかんしては意見が分かれており、いまなお論争が続いている。ほかにも、バークリが誰を論敵として想定していたのかという問題や、彼が自説の根拠を明確に提示しなかったという欠点もある。そこで氏は本論文において、このように錯綜した「序論」で展開される「記号理論」の議論を解きほぐしながら、最終的には「精神の形而上学」へつながる「思念 (notion)」の予備的考察を試みる。

2. 論文の構成

本論文は短い序論に続く四章仕立てで構成されている。詳細は以下のとおりである。

序論

第一章 「抽象一般観念」への批判

- 第一節 第七、八、九節における抽象理論
- 第二節 第一〇節の検討
- 第三節 第一三節の検討
- 第四節 「抽象一般観念批判」の性格とある反論への応答

第二章 「代理する」について

- 第一節 バークリの主張のあらまし
- 第二節 represent は類似の関係を表す
- 第三節 「代理」が成り立つ条件は「内包」である
- 第四節 論点先取という懸念

第三章 「示唆する」について

- 第一節 「示唆する」という言葉が用いられる背景
- 第二節 「示唆」には「代理」が前提されねばならない
- 第三節 「任意」は必然に転化する
- 第四節 「状況 (circumstances)」は「示唆」にとって不可欠である
- 第五節 「示唆」的な知識の射程

第四章 意味について

第一節 ロック的でない言語の使用について

第二節 「恩寵」「力」「精神」という言葉の意味

第三節 「思念」と「意味」の関係

第四節 観念は「精神」の能動的なはたらきを「表示」する

第五節 「思念」から「精神の形而上学」へ

3. 論文の梗概

第一章においては、パークリによる「抽象一般観念」批判が吟味される。この観念の最たるものが「物質」だからである。そうするにあたって氏が注目したのは、その批判の仕方である。この点は、我が国ではあまり注目されてこなかったとして、氏は国外の最新の研究を踏まえつつ考察を進める。すなわち、第一節では「序論」第七、八、九節において、論敵（ロック）の抽象理論を丹念に追跡し、ここに数種類の抽象が展開されるありさまを見る。続く第二節と第三節では、このロック的抽象理論への批判である「序論」第一〇節と第一三節が検討の対象になる。ここで展開される議論は以下のとおりである。

そもそも「抽象一般観念」とはいかなるものか。それは人間が抽象能力によって形成する普遍的な概念と考えられている。しかしパークリは、その能力や「抽象一般観念」をまず内観に基づいて否定する。というのもわれわれは、おのれの心を覗き込んでも、それを見出せないからである。じっさい、多くの個別観念から個別的なところを引きぬいて共通するところを合成したところで、そうした観念を知覚することは不可能だろう。たとえば、赤でも黒でも白でもない色を知覚できるだろうか。こうして、「抽象一般観念」はいったん否定される。しかし、氏はここから独自の解釈を展開する。すなわち、いま述べた批判は不首尾に終わる可能性がある。抽象一般観念を知覚できないという場合、その観念がたんなる「心像 (mental image)」であるなら、たしかに内観に基づく批判は妥当かもしれないが、しかし、論敵はもちろん抽象的物質を感官の対象にはしていないからである。それゆえパークリは、別の批判も用意していた。その批判によると、「抽象一般観念」を形成できると言い張る人びとの主張は、彼らも認める一般原理と矛盾している。パークリは、論敵の主張を逆手にとって、彼らを窮地に追いやる。この批判は、論敵も同意することを出発点にして、彼らの主張の矛盾を露呈させるので、帰謬法（あるいは対人論法）に近いものであろう。しかし、ここで氏はパークリとともにこう問いをたてる——だが、そうなると、われわれは一般的あるいは普遍的な知識をいかにして手に入れるのか。

第二章において氏は、一般的な知識が得られるための条件という問題に取り組む。その論述の中心となるのは、「代理する (represent)」という用語の分析である。パークリによると、ある個別観念がその他の類似した個別観念を「代理する」とき、その観念は普遍的になる。represent は当時、論敵の物質論者も用いた言葉であったが、パークリはその意味を決定的に変更する。すなわち、represent は観念と物質の関係ではなく、観念と観念の関係にかかわると言う。しかも、ここでの

represent とは、「強制的な」関係を含意する。というのも、パークリの用法において、represent は想像力による「再 - 現前」を意味するがゆえに、まさに類似した観念のみをもたらすからである。氏はここまでパークリの論述を辿り、次に氏独自の問いをたてる——しかし、その類似を見出すための条件とは何か。氏はウィンクラーやダンシーを手引きにして、「選択的注意」を挙げる。だが、「選択的注意」がはたらくためには、われわれは観念のどこに注目すべきかをすでに理解していなければならない。すなわち、われわれは、「概念的な特徴」すなわち「内包 (connotation)」（ジョンストン）をあらかじめ把握しているはずである。したがって、「代理」が成立するには、「内包」が前提されることになる。この「内包」の指摘は、第四章で検討される「思念」や「精神」と関連する。「内包」は感官のあずかり知らぬところだからである。

第三章において主題となるのは、「示唆する (suggest)」という用語である。「示唆」は「序論」ではほとんど取り上げられていないものの、『人知原理論』とほぼ同じときに執筆公刊された『視覚新論』（1709年）で論じられている。氏はそれを導入することによって、「記号理論」の内容を一挙に拡大して、自然の創造者としての神にまで説き及ぼうとする。「示唆」は、類似しない観念間の関係に用いられる術語であって、「代理」が類似の関係に用いられたのと対照的である。それでも、両者はまったく無関係ではない。じっさい、ある観念がその他の類似しない観念を「示唆」するとき、その「示唆」とは一般観念と一般観念のあいだの一般的な関係であって、この一般性を成り立たせるのが「代理」だからである。それゆえ「示唆」は「代理」なしに成り立たない(氏によるこの指摘は、国内外を問わずほとんど見られないもので、卓見として高く評価されよう)。

こうして、「示唆」において、観念と観念の関係は一般的であるものの、しかし他方で、示唆される観念同士は類似しておらず異質である。この異質性は、観念同士の「任意な (arbitrary)」結合を含意することになるのではないか。そして、その結合が「任意」なもの、そのつど変わりうるものであるなら、それは「一般的」にならないのではないか。この問いに対する答えとして、氏が展開するのは、ソシュールを援用した「体系内における必然性」である。つまり、もともと「任意」であったものも、いったん定められた体系においては必然的なものに転化する。そして、その必然性を担保しているのは自然法則である。このことを示したのちに氏は、「示唆」の関係がたんなる単線的な関係ではなく、状況に応じた重層的な関係であることを提示する。この関係は、最高の精神たる神が定めた自然の豊饒な構造（本論文末尾で触れられる）に直結する。

第四章においては、「言語の意味 (signification)」が論じられる。氏によれば、こうすることによって「記号理論」を従来の解釈から大幅に拡大して「精神の形而上学」と結び付けることができるからである。氏が典拠とするのはパークリ中期の著作とされる『アルシフロン』（1732年）である。氏はまず、パークリの新たな「言語の使用」を考察する。その「言語の使用」によると、言語は、たとえ観念を表示していなくとも、感情や行動（学問的探求といった理論的行為も含む）を喚起するなら有意味になる。パークリは、現代の「意味の情緒説」や「言語行為論」と似た考えを抱いていたわけで、たとえば、自然学の「力」や宗教の「恩寵」といった言葉は、この「言語の使用」に基づいて有意味になる。ここまでパークリの論述を辿ったうえで、氏はこう問う—それでは、「精

神，靈魂，魂」（以下「精神」とのみ略記）という形而上学的な言葉はどうであろうか。この言葉も上述の「言語の使用」をつうじて有意味になりうる。しかし、そうすると、ある問題が生じる。というのは、もし「精神」にこの「言語の使用」を適用できるなら、同様に、かつて否定したはずの「物質」にもそれを適用できることになりかねないからである。そこでパークリは、「物質」と「精神」の決定的な違いを示すために、「思念」を導入する。「思念」とは精神のもつ能動的で自発的なはたらきの認識だというのである。こうして、「観念」が感官の対象を指すのにたいして、「思念」は「精神」にかかわることになる。そして氏は、この「思念」を足掛かりに第四章の最終節で「精神の形而上学」を望見して論を閉じている。

4. 論文の評価

まず肯定的に評価できる点を挙げておこう。第一に、テキストの詳細な読解と分析があげられる。とくに、第一章での「序論」の「抽象一般観念」のテキストの読み方は、従来の解釈とは一線を画するもので、パークリの批判に論理的な構造（論敵の論理的自己矛盾）を見た点は卓見であろう。第二に、先行研究への目配りも評価したい。この点は、とくに第二章と第三章で顕著である。第二章第三節の「内包」の論点や第四章第四節の「状況」の観点は、ジョンストンやランドの議論を参照しながら展開されている。最後に、我が国ではこれまでほとんど参照されなかったパークリのテキストに挑戦している。『アルシフロン』を典拠にした第四章での論述がそうである。本論文の最後ではパークリ最晩年の著作『サイリス』（1744年）はほんのわずかしき言及されていないが、氏の他の公刊論文にはこの著作のより詳細なテキスト分析が見られる。これら『アルシフロン』や『サイリス』は、いまだ邦訳されていないだけでなく、我が国ではこれらに言及した論文すらきわめて稀である。

次に課題を指摘しておかねばならない。論述ないし論証にやや不備が散見され、日本語もけっして適切とは言えない表現がまま見られる。とくに第四章の後半でそれらが目につく。しかし、本論文の最大の難点は、第三章までの論述と第四章のそれとのつながりであろう。氏も言うように、たしかに「序論」には言語の意味にかんする議論がある。したがって、この議論を「記号理論」のなかに組み込むことは、ある意味では当然かもしれない。しかし、氏が第四章で展開しているのは『アルシフロン』における「意味の情緒説」や「言語行為論」に似た「意味論」であって、これが「序論」での「代理説」に基づく「意味論」とかなり異質であることは論を俟たないのではなかろうか。さらに、「観念」が「思念」を「表示する」という指摘から出発して、感覚から精神（とりわけ知性）への上昇過程を論じる部分にはかなりの混乱と飛躍があると言わねばならない。先に言及した第四章後半での論証と日本語の乱れ、そしてそれに伴う説得力の乏しさはおそらくここに由来する。氏が本論文の最後でみずから述懐しているように、「「感官の観念の哲学」と「精神の形而上学」とのあいだには、かなりの径庭がある」のである。あえて氏を擁護するなら、「思念」はパークリ哲学の最大のアキレス腱であって、研究者のあいだでもっとも意見が分かれる論点でもある。したがって、もしパークリ哲学の最初期から最後期までを「精神の形而上学」として読み解こうとする氏の

野心的な試みを貫徹しようとするのであれば、「思念」にかんしては、本論文よりもはるかに入念緻密な議論や論証が必要であろう。今後の研鑽に期待したい。

最終試験は2013年9月27日におこなわれ、試験終了後、審査委員会は一致して竹中氏への学位授与を承認した。